

調剤鑑査システムの薬局への導入

タイハイ薬局メディカルモールしろいし店

薬剤師 安川 徹

【目的】

薬剤の一包化は薬剤の認知が困難な高齢者や服用する薬剤の数が多い患者のコンプライアンス向上に有用な方法である。だが、一包化の際には錠剤・カプセル剤の計数間違い、規格間違い、別薬調剤などの調剤過誤が起きやすく、また鑑査に時間がかかるという問題点がある。当薬局ではこの問題を解決するために調剤鑑査システムを導入した。今回は当薬局での使用状況と問題点を述べていく。

【使用機器】

調剤鑑査システムは Medication Detection Machine (MDM) 1 series (TOSHO 製) を使用。あらかじめ画像登録しておいた薬剤の面積をもとに、錠剤・カプセル剤の種類・数の判定を行う。分包機・分包シートは専用のものを使用。

【機器の導入】

すべての薬剤の面積があらかじめ設定されていないため、一包化する機会の多い薬剤を設置時に入力する。新規の薬を鑑査するときはその都度手動で画像を取り込む必要がある。鑑査は付属のカメラで行われ、そのデータは保存されて後から確認することが可能。鑑査でエラーが発生した場合は目視による確認を行う。当薬局では投薬する際に薬剤師による最終的なチェックが行われる。

【考察】

機器導入以前は目視による鑑査を2回行うことで調剤過誤を防いでいたが、調剤鑑査システムの導入で目視による鑑査は1回で済むようになり時間の短縮につながった。また、薬剤の数や一包化の日数が増加するにつれて鑑査効率が上がる傾向にあった。また鑑査システムにより正確な鑑査が可能となり、薬局業務の改善に貢献した。課題として面積で判別しているため同じ大きさの薬との判別が不可能なことや、薬を半分に分けたときは割れ方の違いにより鑑査のエラーが多くなることなどが挙げられる。今後も鑑査システムの特徴を理解し、一包化の正確性・鑑査速度を向上させていく。

【キーワード】

調剤鑑査システム